

會



報

1953年5月

167

日本山岳會

山の映畫

瀬名貞利

昨年マナスル先鋒隊が撮つて來られた天然色寫眞の幻燈（近頃は古風な言葉はあまり見られずスライド映寫などと云う事が多いが）は非常に興味が深かった。殊に二月の小集會で寫された分は大變美しく高木氏の説明もよかつた。色のあることも勿論いいが普通の印畫より何としても立體感が強く私自身ヒマラヤに在る様な感じがあつて樂しかった。近頃は健康が優れず一向に山に登れない所爲もあるがあの會は特に深い感銘を與えて呉れ、あの群青の空に浮ぶアンナブルナやヒマルチュリからマナスルの銀嶺があと迄くつきり腦裡に刻まれていた。

これだと思ひ出したのは中學時代に見た辻村伊助氏の歐洲アルプスの幻燈である。大正四年の夏病後の保養に小田原に轉地した父について行つた私は、ある晩土地の知人に誘われて此地の公會堂で催された講演會に行つた。丁度其の頃から歸朝された辻村氏が幻燈を使つて本場のアルプスに關する講演をされたのだが、何しろ暗闇での

お話が主だから辻村氏の風貌は残念乍ら今は思ひ出せない。唯日本語の發音がいやに重くて外人臭い感じがしたが時々ユーモアを交えた判り易い良い講演だつたことを覚えてゐる。それよりその時見た瑞西の風景殊にアルプスの朝夕の山容にはすつかり驚嘆してしまつた。特にばら色や紅に輝く峯々の姿は私には實在の山とは思われない程美しかった。

然し残念なことにはその頃私は山々には全然無知な少年だつたからその時映寫された山々はユングフラウだつたかモンブランか又は他の山だつたのか全然覚えていず（又そのスライドの色は天然色だつたのか彩色されたものか全然判らない）今から考えると猫に小判で勿體ない話だとも思われるが、これが私を山好きにした一大原因だつたことは否定出来ない。

戦後は一向に山岳映畫の良い物が見られないが以前は劇映畫でも實寫物でも仲々優秀なものが多かつた。尤もその大部分が獨乙物だつたから戦後振わないのも無理もないと思う。今明治末期から戦前迄に私の見た山やスキーに關係のある映畫を回顧して頭の中で色々な印象が走馬燈の様に回轉して來るが、戦災で色々な資料を皆失つてしまつたので残念乍ら記憶を辿つて筆を執るより仕方がない。小學

生頃見た活動寫眞は極く幼稚なもので短い實寫や喜劇が多く神田錦町の錦輝館まで行かなければ見られなかつた。登山映畫などは無論なかつた。ただスキーの實寫が一つあつたことをかすかに覚えてゐる。佛蘭西物だからアルプスで撮つたものだろうが、スキーのジャンプがあつて今考えるとジャンプの下から仰ぐ位置で撮つてゐるから人物がひよい／＼と空に飛び上るのが珍らしいので子供心でも印象が深かつた。然しランディングの所も滑走の所も寫つていなかつたと思う。どうせ初期のジャブだから大したことはなくランディングを追いかけて撮る程でもなかつたのだろう。その後は實寫物で瑞西や伊太利國境の雪の山が出て來た記憶はあるが特に印象に残るものは無かつた。

スキー映畫で最初に大學時代の私を驚嘆させたものは無聲時代にシュナイダーの主演した「スキーの驚嘆」である。あのシュナイダー一派の人々の豪快なスキーテクニクとアルプスの雪原の素晴らしさは何度見ても飽きたらなかつた。この映畫は映畫館にはかけられず山岳會などの催しで特に見せられたものだつたがそれだけに難味もあつた。

その後最後の登山の劇映畫として一般に公開され我々を喜ばせたのはルイス・トレンカアやレニー・リーフエンシュタールが出演した「聖山」である。筋は簡單で幼稚なものだがリーフエンシュタールも若くて未だスキーも出来ない可憐なダンサーであつたし、アルプスの牧場の春景色や雪の岩峯の背景が實に美しかったし、アルプスの氷や岩と取組む登山の出來る劇も珍らしかつた。その後山の遭難を扱つた映畫があり、リーフエンシュタールが初めてスキーを穿く姿を見られたが今は題名を忘れてしまつた。それよりその頃の大物はマッターホルンの初登攀の悲劇を取扱つた物でシュナイダーやトレンカアが出演し仲々面白かつた。

トオキイになつてからのスキー映畫ではやはりシュナイダーの主演した「白銀の亂舞」が先づ想出される。もう此の時はリーフエンシュタールがすっかりスキーをマスターしてゐてシュナイダーと一緒に狐になつて達者にスキーで逃げ廻つてゐた。又これの主題歌に使われた「私の山の家」と云う歌が若いスキーヤーの間で大歓迎を受け、未だに我々の仲間はそのメロディを聞けばスキーを思う位である。



マナスルウ通信

★三田幸夫★

★三月廿三日 カルカッタにて
今ひつそりした食堂で獨り朝食をとっている。高木と村木は領事館へ出かけた。ダムダムにある荷物の通關の打合せだが、うまく行けばと心配だ。又吾々の飛行機を延ばすとなると益々本隊の出発が遅れる。

今頃先發の四人と八人がカトマソで大騒ぎをやつてることだろう。出發以來皆睡眠不足續きで、夜晝逆轉したようだ。やつと今朝あたり人間らしくなつてきた。然しフラフラし乍ら辰沼や石坂の食欲旺盛ぶりは頼母しい。山へはいつても同様でありたい。

今日は午前十一時にオール・インディア・ラジオが放送の打合せに來る。午後二時頃にしたい。英語だけに少々面映ゆい。三時にはアリボールの氣象臺でマル博士のティ・パーティに招待されている。ヒマラヤン・クラブのクロフォード氏もオール・インディアも來ると云つていた。柏谷領事も來る筈。夕食には元千田商會の山田氏からスキ焼に招待されているが、明朝二時半起床のことを思うと御断りした方が好きさうだ。

カルカッタへ着いて五日になるが、餘り忙しくてもう二三ヶ月もいるような気がする。ヒンドスタ

ニも、殆ど忘れたような言葉が段々思い出されて、餘り不自由を感じなくなつた。久し振りで自分の田舎へ歸つたような氣安さを感じる。

それにしても十人の連中が到着以來夫々組を作つて實によく駆け廻つた。百度近くの炎天下、言葉も不自由乍らよく用がたりたものだと思つてゐる。矢張りホッボリ出されると何かやれるものだ。今また高木からの連絡で今日中の通關が難しそうとのこと。幾度もI・A・Nの取消をしなくてはならぬ。今迄に先發隊の残して行つた未解決の問題が澤山あつた。之を處理し乍ら吾々の準備を進めねばならぬ。之が吾々の仕事で、遠征隊の最初に印度でぶつかる問題だ。今後の爲非常に好い勉強に

なると思うが。

尚各國の遠征隊は皆自國の外交官をして盛大なレセプションをやつてゐる。吾々もそんな事の必要に迫られるケースがあると思う。吾々は金が足りないし手も不足なので、外務省あたりにそんな手傳いをして呉れても、相當日本の顔が好くなると思うのだが。

★三月廿九日 トリズリバザールにて

今日はカトマンズ發以來三日目今トリズリバザールへ到着、河床の上マンゴーの大樹のある廣い素晴らしい公園のような處に天幕を張る。今朝チャトラリ(九九〇米)のレストハウスを立つてから、約四時間下りばかり。膝のお皿がすぐつたくなる程、それから河原の行進。炎天下照りつけるという暑さ。先發隊は毎日の報告を小生宛に残して行くことになつてゐるが、今迄の處順調にいつてゐる。昨夜此處で小生のカルカッタ・オール・インディア・ラジオの放送(先日の録音)を明瞭に聞いた由。

今夜は仲々暑そう。それに今これを書いてゐる時も大分ブトに襲撃されてゐる。田口は人夫の前拂に大奮闘。竹節は報道の仕事。依田の寫眞の活躍は物凄く、キャンソに着く毎に不自由の中で現像。村木は荷物の整理、報告記録等一番忙しい。キャラバンの中一寸休んでも村木と辰沼はスケッチの手を休めない。兩人共二冊は終つたらしい。繪具の色が仲々よろしい。水筒のミルク入の紅茶のお蔭らしい。この調子だと兩人共多作を以て鳴る畫家とならう。歸國したらヒマラヤ歸りの多作家展を開かねばなるまい。田口は往還の娘を見ることと矢鱈にナマス(今日は、御氣嫌よう等の意)と怒鳴る。彼女らは日本娘の如くはじらいに身をくねらせて行く。田口は得意だが誰か「失禮しちやうわ」と云つてゐるんだらうにギャフン。とも角この炎天下に皆へコタレ乍らも、ヘラズ口だけは愈々達者で、空腹患者は益々ショウケツ

の微候。先ず隊長として安心してゐる。

何しろ根據地迄は出来るだけ現地調便という先發隊からの申送り、頗るまづいもの許り。隊長として皆がサマに行く前に榮養失調になつてはと、今夜は少々氣張つてカトマンズで分捕つたスコッチウィスキーをあけて、海苔罐位は出そうという事になる。このウィスキーとは、去る廿六日後發隊がジュネラル・カイサーに謁見して日本刀を献上した處、將軍のAnything can I do for you という甚だ親切なお言葉に、圖々しき田口は甚だしくおらしく申譯なきような顔をして小生を顧み、飲物の寄贈をお願いしてはと小生の許可を求めた次第。隊員も皆固唾をのんで心配相な顔で小生を見守る瞬間、隊長としても思わず「好かう」と許可を與えた處、出發の日スコッチ並にラムが二打届いたという次第。ネパールにも實に立派な將軍がゐるものと皆感激してゐる。日本杯には到底これ丈の人物はおらぬだらう。但し之は早川種三に同様の感謝を送るべきである。

昨日は一七〇〇米のパンチラ峠で科學班の中尾隊と別れる。饑別に前記ウィスキーを少々贈る。彼らがいなくなるのと植物の名が全然解らなくなる。少々怪しいが一番の識者竹節に頼る事に。科學班との再會は六月四日サマという事にした。

昨夜の宿地チャトラリは汚い小さな部落で、レストハウスも頗る汚なくユウモリの糞の雨で皆大開口。ドクトルは早速皆にマラリヤ

登山用品

東京・新宿駅前

かざみ

TEL(35) 2959・2960

酒井菊雄著

北アルプスのオールカメラ版であり、ガイドブックをかめた山のエッセイ。登山家をうならせる記録寫眞八十頁。

黒田初子著 價B6上製 三〇頁 三〇〇圓 千三〇圓

山の饗宴 新編早々夫君と共に初登攀以來山への無限の思慕と憧憬を寄せられる著者の久方ぶりの著

冠松次郎著 價B6上製 三〇頁 三〇〇圓 千三〇圓

味の谷の本

山を愛し自然を愛すること五十年の山の人生を悟られた懐かしい記録五十篇

明玄書房

東京都新宿区早稲田町三丁目三番 郵便局隣 東京四二〇三三

今漸く人夫の前拂も終了。皆も身體を拭いて小ザツパリした處。小生獨り蚊やり練香の傍で之を認めてゐる。依田君はもう携帶暗室に手をつゝ込んでゐる。竹節君共物凄く精力だ。ラジオは印度が時々好く入るが日本は駄目。ハンデイトーキは、キャラバン中は二隊の間が離れ過ぎてゐる爲駄目。いいものを作りたいものだ。

今朝早くヒマール・チュリの頭とガネシユ・ヒマールの雪峯が一寸見えたが直ぐ雲中に没する。早朝だけ見えるようだ。之から暫く見えない事になる。明後日は小生の誕生日なので丁度アルガトバザールで先發隊と合流した處で、バラカナ（大宴會）をやろうという事に決める。

取りとめない事だが吾々の旅の気分がこんなものと云う事をお傳へする。精しい事は竹節の精力的な報告を御覧願いたい。會の諸兄に呉々もよろしく。

以下は近藤等氏宛私信より
拔萃

★四月五日 マチャコラにて
こはブリガンダキ河へマチャ
コラ（魚の河の意）が合流する地
點、吾々の天幕場は割に廣々と開
け、附近に近くの山から放牧の人
々の臨時の小屋掛がぼつ／＼あ

る。昨夜は附近の暗黒の山々に燈る。火が點々とともり、急に多くなつたりまるで狐火の樣。原住民が草を燒いて新らしく生える草の肥料にするのだという。まるで空かと思われる高い地點に突如として現われる火が誠に美しく印象的だ。このキャンブ地點は三千乃至四千呎位のところらしく、然し周圍に迫る峯は見上げる様な仰角で皆一萬呎以上らしい。上高地から見る奥穂よりはるかに高く感じる。谷がますます深くなつてきたことを思わせる。

ブーガンダキの惡場は昨日あたりから始まつた。話に聞いている今日邊りからもつと惡くなる。すると仲々面倒。先發の高木隊のポーター、一八〇名中、三〇名がここから引返して行くのに途中であつた。我々の隊でも逃げ出す奴があるだらう。補充の問題が苦勞だ。未だサマのベールズ迄は十四日の長旅だ。このまま引返すとして飛行機がうまく行けば東京へ着く日程と變らない。長い苦勞な旅である譯。

しかし幸な事に毎日炎暑三二乃至三十六度の中を全隊一人の故障もなく整然とキヤラバンを續けて來てゐるは有難い。優れた隊員、立派なシニルバ、忍耐強いボーター達など、私は本當に恵まれてゐると感謝してゐる。高木隊の如き毎朝正七時、時計の如く正確に出發してゐる。そして我々が翌夕同じキヤン坪地に着く迄には立派なしかしニューモラスなレポートが私の手許に届く。私の出發に當つて出した指令が完全に守られてゐる。二〇〇名の隊の仲々なし得な

い事だ。
今思い出したがが三月卅一日は五つ目のキャンブでチャラングフエディイという河原に近い田の中に突出した小丘の上。上が眞平らで芝が生え、丁度ゴルフのグリーンの様。チルマンが好んでキャンブしたという。丁度私の誕生日なのでバラナを奮發した。ペンシイが得意の鳥の丸焼、ウドンその他大馳走。ウイスキーも數本空いて、シエルバも踊り唄い、本當に楽しい一夜だった。

夕焼の空にガネツシユ・ヒマールの連嶺がぼんやり浮び絶好のキャンプサイトだった。私はここで五三歳の最初の楽しい一夜を送つたのだ。五三歳といえはヒマラヤの大地に向うには確かに年をとりすぎてゐる。が私は隊の構成分子の一つとなつて出来る丈の事をして見度い。殊にリーダーという重大な責任者として。

ひまがあつたら從來のヒマラヤ遠征隊の隊長の年令、參考迄に調べ、間に合つたらベースキャンプへ送つてくれ給え。では之で失敬。

★四月十三日 サマ・ベースキャンプにて

全員無事に到着。二、三日準備後本格的計畫にかかります。マナスルは想像以上難しそうだ。ベストを盡します。今日は午後からの風が雪に變りました。天候が崩れ出したので心配です。

註 一行は新聞で御承知の如く
第四キャンプの建設に成功、目下
アイスフオールと戦いつつ第五キ
ャンプの推進に敢斗している。

島田 巽

マッターホル
ンのケープルカ
ー計画について
は、会報一五四
號に一度報告し
たことがある
が、その後、松
方さんとともに
スイスを訪れた
ときにも、反対
運動がかなり強
力に展開されて

いることを知つて計畫の出願に對しては地元の人たちに限らず各國およそ山登りバグを含んでいた。人々を反對陳情を行つた人は歐洲各國で九萬五千人、インターナショナル・登山團體は四十を越す。このような廣汎な反對されたせいもあるがブルカ問題は本一ツボがついたのである。ホルンは護られたのだから数は數多くの登山家をおろさせるに足ると思う。

一月十六日付のタイ
ネーヴ駐在の同紙特
道として、マッター
鐵道は連邦政府の決
却下されたと傳えて
よるとスイス連邦政
府の町に對して、
(五、三一五フイー
ルツゼー)(八、四
までの鐵道建設權
しかしこの許可と同

時に、このシュワルツゼーまでのケール・カーは、いかなる場合においても、今後マッターホルンあるいはフルゲンドラート（イタリア側ブルイェンからのケール・カーの終点）まで延長されることが考慮される（第一期工事と考えられる）べきものではないことを明かにしたのである。

この連邦政府の決定はツエルマットの原計畫を承認したもので、シエワルツゼーまでは森林地帯を全然損傷することなく、ツエルマットからも、鐵道線路を眺めることがないという點、ほとんど風致を書さないで済む。その上、中間驛となるフリは夏冬を問わず、ツアーの出發點になるだろうといわれている。

もともとケールブル・カー計畫はイタリヤの實業家の企畫になつたものであるが、イタリヤ政府も、最近に風景保護の現行法を活用して、この企業計畫を認可しない旨で決定した。したがつてマッッターホルン周邊に關する限り、問題は一應落着いたわけである。

★ヒマラヤ委員會事務局

かねて東京驛協鐵鋼ビル前の辰沼方に開設中の委員會事務所は殘務も一通り片づいたので一應閉鎖することゝし、四月中旬お茶の水の山岳會事務所に移しました。但し電話連絡等のため連絡所を神田驛前の西村工業（株）電話三一二三とし、殘務は引續き舊五人委員會の谷口現吉、望月達夫の兩名が擔當しております。

北東ネパールの山々

1949年スイス隊の記録

おなじネパール・ヒマラヤの山といつてもカンチエンジュンガ主山稜の西側にあたるネパール北東隅の山々は、一九四九年にスイスの一隊が入るまで長いこと遠征隊を迎えることなく過ぎてきた。

併しヨーロッパ人はじめてこの一隅に足跡を印したのはい世紀以上の昔のことである。ヒマラヤの先驅者の一人J・D・フウカ

が、歐洲アルプスでさえまだマッターホルンが登頂されない時代にタマル川を遡ってナンゴ峰附近を踏査し、カンパッチェンに至りシンガラ山脈を越えてダーズリンに下つたのは一八四八年のことだつた。

ついで、この地域へ入つたヨーロッパ人は一八九八年シッキム側からジョンソン・ラを越え、カンパッチェンへ下つてきたD・W・フレッチャーの一行である。またA・M・ケラスはその数多いシッキム踏査の途次一九〇九年おなじように北方からカンチエンジュンガ氷河を踏査した。だが、カンチエンジュンガを目指した一九三〇年のディンデルワルド隊がネパール・ピーク（七一五三米）、ラムタン・ピーク（六七〇〇米）、ドダン・ニマ・ピーク（七一五〇米）、ジョンソン・ピーク

（七四五九）等に登頂した。なかには、ヤルン氷河からカンチエンジュンガを目指した二、三の隊があるばかりで、この附近

の六―七千米峰への純登山遠征隊は殆どなかったといつてもよい。この地域の山々がダーズリンから入りやすいこと、ネパールが昔のように外國人の入國をやかましくいなくなつたこと、今後ともわが國から遠征隊を送る候補地の一つである。

× ×
一九四七年のスイス隊はピラミッド・ピーク（七一二三米）、タソン・コンマ・ピーク（六二五〇米）、ザンエ・ピーク（六六〇〇米）の初登頂に成功した。この隊は戰後スイスが派した二回目のヒマラヤ遠征隊で（一回目是一九四七年のガルワール・會報一五四號参照）隊員はルネ・ディッテル、アネリクス・ローネル夫人、アルフレッド・ズッター、ウイス・デュナン、それにグリンデルワルドの二人のガイド、J・バルゲッツイ、A・ルビイの六人だつた。

スイスは一九四七年ガルワールで成功を収めた後、いち早くネパール・ヒマラヤの八千米峰ダウラギリを目標としたが、當時はまだ入國の許可が得られなかつたのでこの計畫がそれに代つたわけである。

一九四九年五月一日、一行はダーズリンを發し、五月十日にゾ

ダリに着、更にカン・ラを越えてネパールへ入り、ツェナム、マチン・ラ、クンザ、カンパッチェンを経て十九日目にローナク（高度四六六〇米）にBCを設置することが出来た。

数日の休養が終わると彼らは二つの偵察隊にわかれて行動をおこした。

ローネル、ズッター、ルビイの第一隊は、北方ネパール・チベットの國境上のチャブク・ラへ向つてドローモ（七一〇三米）、ジョンソン・ピーク（七四五九米）、ヌブチユ（七〇一八米）等の山々を偵察した。

ディッテル、バルゲッツイの第二隊は、反対に南東方向ラムタン氷河をさぐつてカンパッチェン（七九〇三米）の登路を求めた。

☆カンパッチェン峰を放棄

ディッテル等はラムタン氷河上四九〇〇米、五四〇〇米に二ヶ所のキャンプを設けカンパッチェンをうかがひ、五九〇〇米の地點迄達したが、この登攀を放棄した。ディッテルはこの理由を次のように述べている。

「上方のテラスへ到達し得たとしても、この方面からカンパッチェンに登ることは難かしいだろう。そのテラスから更に南東へ進むと一つの谷があり、そこから急峻なクレパスの多い雪面を辿ると、頂稜の一番低い地點へ達せられるだろう。頂稜は長さ約二哩で七〇〇米から七九〇〇米まで聳立し天候悪化の場合確實に退却し得ることはむずかしい。併しそれ以外

は登攀技術上の困難さはない。」

☆ピラミッド・ピーク（七一二三米）の初登頂

ピラミッドはカンチエンジュンガ主山稜の北にあり、いわゆるカ峰衛星峰の一つで特に美しい山であるといわれている。從來までこの山を目指した記録は二つある。

第一は一九三六年のC・R・クック、S・チャップマン、J・B・ハリソンの一隊で途中スフィンクス（六九八〇米）の頂に達し引返した。次は一九三九年のシェーマーデラー、バイダール、グロブのトリオがランポ・ラにキャンプを設けて機をうかがつたが、モンズスーンのため退却している。これらはすべてシッキムの根據地から試みられた。

ローネル夫人はBCに待機し、ルビイは體の調子悪く歸國したので、ディッテル、ウイス、ズッター、バルゲッツイの四人で行を起すこととなり、五月二七日カンチエンジュンガ氷河を登つた。途中パンベマにCI、パンベゴルマにC2をおき、主稜上のランポ・ラにC3を張つた。

併しうち續く悪天候に妨げられたので一旦C3を二〇〇米ばかり下へ移し、一行は天候回復をまつためC2へ下つた。

六月四日、漸く静かな天候の訪れに恵まれ、彼らはC4をスフィンクスの北東支稜上六七〇〇米の地點に張るため、ギャルゲン、アルジバ、ダワ・トンドウプの三人のシェルパをつれて發足した。ディッテルとバルゲッツイは更にスフィンクスの頂近くまで路を作つた。この日大氣は特に澄みわた

つて、西方にエヴェレスト、マカルウ、ローツェの山群が鮮かに望見されたという。

六月六日、ウイスは足の凍傷のためC4で待機し、ディッテル等三人は七時にC4を發し、前日の足跡を辿つてスフィンクスへ達し、一旦百米餘り下つてピラミッドへの最後の登りにかゝつた。平均五五度以上の雪底に蔽われた瘦尾根を攀じて遂にピラミッドの頂に立つた。それから二日後、ローナクのBCを出發してから十三日目に無事BCへ歸還した。

☆タン・コンマ・ピーク（六二五〇米）の初登頂

ついでカンチエンジュンガ氷河の右岸をなす山塊の盟主ドローモ（七一〇三米）を目指すこととなつた。これは先にズッターが北及北西から偵察して、その方面からは難しいと判断したもののだが、今度はこれを南から試みてドローモとその西南にあたるタン・コンマ・ピークとの鞍部五六〇〇米にキャンプを設け、そこからドローモを、若しそれが駄目ならその代りにタン・コンマを登らうと考えたのである。結果はやはりドローモは手剛くてやめタン・コンマに登頂した。

登頂の日にはコルのC2からズッター、バルゲッツイ、ローネルが一組、ウイス、パチン、ディッテルが一組となつて六時に出發、全員無事に頂を踏んだのである。

☆ヌブチユ（七〇一八米）の試登

カンチエンジュンガ氷河を中心とする登攀が一段階ついたので、



彼らは更に北方チベット境の山々へその目標を移した。それはその地域が比較的モンスーンの影響をうけないためからでもあつた。カンチエンジュンガの高い主山稜とチベットからの北風とは、南からのモンスーンの雲をささぎる役割をするのである。

彼らはローナクのBCをあとにチシマ氷河とローナク氷河の合流点にC1、更に途次五三〇〇米にC2、翌日チャブク・ラを越えてチベットへ入りチャブク氷河のほとり五五〇〇米の地点にC3を設けた。

六月廿五日、ローネル、ウィスはC3のこり、他の者はスプチュを目標して發足、その北東山稜は長いので南西山稜を登路に選び

五九〇〇米にC4を置いた。それから南西側にまわつてC5を六五〇〇米の山稜直下に設けたが、その夜はモンスーンの強風になやまされた。翌日七時スプチュの山頂に向つたが、雪庇とやせ細つた山稜になやまされ頂上直下二〇〇餘米で退却に決した。彼らの到達地点は六八〇〇米だつた。

☆ザンエ・ピーク（六六〇〇米）の初登頂

彼らは一旦チャブク氷河のC3へ戻り、ディッテルとズツターは下方のザンエ湖をさぐつた後、その東南に聳えるザンエ・ピークを試みるこゝとなつた。ローネル、バルグッチイを加えた一行は、既に全くモンスーン期に入つた悪條

件にもかゝらず、一日でC3から千米の登降をなしとげザンエ・ピークの登頂に成功した。

× × ×

七月一日、彼らは再びチャブク・ラを越え、ローナクの最初のBCへ戻つてチシマ地域の偵察に數日を過した後、七月一八日にローナクの根據地を引き拂つた。そして往路通りクンザへ下り、そこであらたにナンゴ・ラ（五〇〇〇米）を越えてザリ・チュの流れを下り、タマルの本流でチベットからの主要商路に合し、更にタマル川を下つてダンクタ地方の主邑ダブルジュンに辿り着き、そこから東折しサンダクフを経て八月七日の晝頃ダージリンへ歸還して百日に亘る遠征をおわつたのだつた。

尚本文にあらわれる彼らがBCをのいたローナクはカンパツチエンの北東約一〇軒にあり、シツキム側のローナクとは同名異地である。

本遠征の詳細は下記を見られたい。

編集者より——この原稿は一年半餘以前に執筆されたものであることを御諒承の上で読んで頂きたい。筆者にもおくれたことをお詫び致します。

Swiss Himalaya Expedition, 1949: North-East Nepal, by René Dittert (H.J. Vol. X-VI, 1950-1, pp. 25-37)

望月達夫

渡正監氏（大正六年入會五十五番、昭和二十八年二月七日病歿五十五才）

われは古い會員のひとりをつた。渡君の山登りは、東京府立一中四年生のとき（大正二年）木曾御岳に始まり、第一高等學校時代には旅行部委員として活躍、その足跡も南北アルプスから秩父、奥日光、上信國境など中部山岳地帯に廣く及んでいた。内務省に勤めてからは餘り餘暇もなかつたらしいが、福島や青森に在住當時は東北の諸山にも登つたようである。私は大正七年六月秩父京ノ澤を溯つて國師、甲武信、雁坂、將監、八年十月には草津白根、岩菅の二つの山登りを共にし大正七年には朝鮮滿州支那への旅行も一緒であつた。山登りの仲間としては本當に信頼の出来るひとりであつた。

彼はJACの前身博物同志會の血をひいて、蝶類の蒐集研究に熱を上げ、「山岳」第二十三年二號（昭和四年三月發行）に「日本の高山蝶」という研究を圖版入りで發表している。戦後會退した折も「こう肥つては山へはもう登れないが、蝶だけは續けているよ」と樂しそうに語つていたが、その蒐集研究も今は空しくなつた。然し本邦有数のそのコレクションは近く科學博物館に収まる由で渡君も定めし満足であらう。科學博物館

にはさきに名譽會員高野鷹藏氏の蝶のコレクションが収められ、いまた渡君のがこれに加はり、本會會員の苦心になる二つの標本が永く残ることになつたのである。（藤島 敏男）

★アコンカグア遠征隊の歓迎會

本會では五月廿九日午後六時半から日本橋室町三井別館地階フロアでアコンカグアから歸つた早大遠征隊の歓迎會を開催します。

山岳 第四八年

内容豫告

- マナスルラ踏査行 今西 錦司
 - 冬の知床半島の山々 京大山岳部
 - 木曾御岳、赤川谷と傳上川 新井 清
 - ツェルマットのクラブルームを中心として 成瀬 岩雄
 - セガンチニの跡を訪ねて 津田 正夫
 - ヒマラヤ遠征と英國の人々 島田 巽
 - 確 保 論 金坂 一郎
 - 「追悼」 秩父宮殿下（横・松方）
 - 「ヒマヤン・ノート」 スイス隊のエグニレスト（田中 榮藏）
 - A5版約一八〇頁 寫眞三〇葉 地圖數葉
- 以上の内容をもつて編集を了し組版に着手、六月末刊行の豫定です。



会 員 通 信

アンデスに残した土産

関根 吉郎

大變ご無沙汰いたしました。皆様お元氣のことと思います。マナスルウ遠征隊も決定しよう今日あたり出發してゐるようなことを村から傳えてきました。遙かに成功を祈るものであります。

私共もアルゼンチン國政府並びに體育連盟、その傘下のスキー・山岳協會の大きな援助を得まして國賓の待遇という肩のこる思いをしりました。幸い登山の方は計畫通り無事に済みました。いろ／＼と御援助を頂き有難うございました。

歸つてゆつくり御報告致さねばならぬと思いますが、一番感じたことは馴化の問題で個人差が大きく、七〇〇メートルの馴化に二週間を要した隊員もおります。概して肥つた男は馴化がおそいようです。マナスルの隊員がまだ東京にいられるなら是非血脈だけは

十分精密に検査されるがよいと思います。

われ／＼もメンドサで體格検査を受けたのですが、山の上で頭痛のはげしい者は必ず血脈が他の者より高いようです。

アルゼンチンも來年、ドウラギリに行くので、準備中でいろいろ／＼そんな話もしてきました。高い山がいくつでもある國は全く羨ましい限りです。アンデスに對して日本流の登山の考え方を植へつけてきたのがわれ／＼のアルゼンチンに残した最上の土産かも知れません。

登山を考えなくてもいい國です、私共を尊敬してくれるのでこちらでも好きになります。楽しい思い出深い旅ができましたことを嬉しく思つております。

五月上旬歸國の豫定です。
三月十七日サントス港のサントス丸にて

德舜別岳

大橋 克也

偶然所用があつて室蘭へ遊行しましたが、これこそ「北海道のピート塘の様なサラ／＼した粉雪」にまみえる絶好のチャンスとばかり、無理に日程を削いでホロホロ岳を狙いました。白一色の中に昭和山だけが黒く盛り上つて煙を吐いている様や、宿で食わされた「なまこ」などみな驚きの種でしたがそれに増して雪質の良さはびつくりしました。それはピート塘どころが馬鈴薯澱粉と言いた

い程。
さて十三日は天候不良でしたが時々晴間があり一喜一憂しながら

次第に細く鋭くなる北東尾根を

室蘭の友人と二人で登りました。中腹では伐材場とみえ、太い切株が二軒程横たわり、それらの上にふくらみ雪が積つてゐるのを松茸の化物と云つた感じ。更にその上の

風雪地帯は木々が完全に霧水となつて輝きまるで白珊瑚の林です。德舜別岳の斜面は相當に急峻で最後に二百米はすつかりクラストしているののでシー・デポにしてマール色の雪面をアイゼンなしで登りました。

德舜別岳頂上が一時半。新大瀧から四時間半掛りました。悪天と時間不足でホロホロ岳は断念してこれに別れを告げ粉雪を飛ばして白珊瑚の林や松茸林、それに白樺の原生林を縫いながら滑り下るのは壯快以上のものでした。

(二・一四膽振・新大瀧にて)

南御室小屋

望月 達夫

十六年振りで訪れた早春の夜叉神峠には木の香もあたらしい小舎がたつていた。バスも芦安の最奥大曾利まで通し、野呂川への自動車路も峠の直ぐ下まで完成し、芦安鐵泉の立派な旅館が出来るといふ變りようだ。三月廿一日の夜を峠の小舎に一泊、廿二日の快晴には刈安からの白峰三山のおほらかな雪嶺に接し、次第に深くなつた積雪に杖立峠で輪ガンをつけるときは青い空に甲斐駒がキラリと白かつた。辻山に近づいて雪はいよいよ深くラッセルに時間をとられ、南御室へ着いたのが四時過。小舎は荒れすさんでこのまゝでは遠からず使用に堪えなくなるのだろ

う。戸のない入口に雪の壁を作り白樺の葉を厚く敷いて泊る。

廿三日、今日は風を越えて御座石へ下ろうと思つては山越えも面白くないので、ゆつくり食事をしてラッセルした往路を下ることとした。雪は夜叉神近くからみぞとなりやがて雨とかわつた。二日續きの休みだったが、誰も登山者のいない静かな三日だった。

武尊山スキー行

松本 熊次郎
原田 幹市
野口 末延

昨夕から夜半迄降つた新雪を踏んで上ノ原山の家より奈倉澤を廻行、手小屋谷との中間屋根の五六三五M南の鞍部に取付き、この尾根を急勾配で登り、コブをよけて手小屋谷側の樹の林の間を縫つて頂上直下迄行き、最後に凍つた急斜面を強引にスキーで登つて二一五八Mの武尊山頂上に立つた。(所要時間七時間)稀の快晴に微風という程かな日東であり眺望も又素晴らしい。南から東への山波の黒いに引替へ北から西への山々、特に間近に見えぬ燧岳から至佛、平ヶ岳から左に續く寶川笠ヶ岳迄の連峯は白一色、一の倉の岩壁は雪が斑で一目で判つた。遠く上信國境の山迄好く見える。下りは往路を滑り降りたが雪は悪くなりそれに平均年齢四十七歳の三人、疲勞で轉倒に續く轉倒、山の家に歸つたのは笠や朝日岳の銀嶺が青色に染つていた頃であつた。

(三・二二)



下駄はきの登山者が何だかふえて來たようである。上野から谷川岳の岩場に行くような猛者連中ばかりと思つ

たら新宿駅からのハイカーなどにも少くない。これも一つの流行なのであろうか。

岩場までに靴紐をすり減らしては、ネールの靴をお安くない今日もつたない話だし、第一汽車の中の生活に下駄ほどラクな履物は無い。日本人には下駄の味は忘れられないからね。

それに小さなサブルツクをしよう、ニッカーの腰にかつての高校生のような手拭をぶら下げてゐるのは頭に疲れたチロル・ハットをのせていようが、ノウハットであるうがちよつと意氣なもんだ。などと決めこんでいる仁もなきにしも非ずである。

しかし山を知らないものから見れば錢湯へでも行くのじやないかと思わざるを得ないような輕装も結構だが、垢と土ほこりで汚れた下駄を脱いできれいな座席を踏みしめるには谷川か驛で足くらは洗つてくるのが禮儀。(T)

マナスルウの映畫會

橋本三八

マナスルウ登山隊も元氣旺盛で頂への道を進んでいるようで、毎日の新聞を楽しみに見えています。それについて當地北九州では昨年の先發隊の竹節さんの十六耗映畫を持ち廻つて毎日新聞社の基金募集運動に應援しましたが、下關、小倉、若松、八幡市と一廻りし、私の勤める八幡では四月十三日夜表連續で製鐵所の會館で催しました。表は主として學生、夜は一般で千人ばかり集りました。映畫はマナスルウと外に文化映畫、劇映畫と組合せましたがマナスルウの映畫はタイトルもなければ説明もなく、それかといつて全然無説明では判らないので、きゆうよの一策で岩波文庫のヒマラヤによつて略圖を示し説明を加えてどうにか間に合せましたが、ずい分冷汗をかきました。それにしても美しいヒマラヤ風景には山岳人等しく驚嘆の聲を擧げました。そして次に接することの出来るであらう今年の本院の映畫にいよいよ絶大の期待をかけることになりました。願わくば登頂の榮冠を日本山岳人の手に。九州の一角からも祈つて止みません。(於八幡市)

春の仙ノ倉谷

渡邊 公平

藤井、成瀬兩強豪のキビに附して三月二十一、二の兩日、仙ノ倉へスキーを進めました。土樽の山の家に一泊、翌朝八時半頃出發という春らしいのんびりした旅。

鐵橋を渡つた所からスキーをはいて快晴の春陽がいつぱいに溢れている谷を廻り、毛度澤からシツケイ澤に入り頂上直下まで登り、二時に引返してその日の夕方土樽發の列車で歸京。

この連休に僕たちの他に三パーティが登つたわけに實に静かなものでした。谷も斜面も素晴らしい。アプロチも短かく、展望もいいのにどうしてこう人臭くないのか意外でした。

毛度澤の法政の小屋のあつた邊りに是非とも根據地が欲しいところ。これさえあれば素晴らしい山スキーのグレンデとして今度は賑いすぎるようになるかも知れません。が、無いよりはあつた方がよさそうです。

東京から夜行日歸りのスキー登山も若い人になら何でもないでしょうが、土樽で一泊すれば老頭児組にも好適な春のコースと云えましょう。仙ノ倉、萬太郎、平標の山容は實に立派なもので春の山だなど痛感。

八甲田スキー行

古澤 肇

三月二十日北斗で發つて二十五日まで酸ヶ湯でスキーを楽しんだ。今冬は御多分に洩れず八甲田も天氣は變調で、寒中に雨が降つて樹氷が少なくなつたそうである。もう少し早く来ていただけたら、と温泉の大原専務さんがいはれる。

しかしそれは例年に較べてのことであつて、登つてみればやはりこの山の雄大な景觀は他に類がないほど素晴らしい、ことに赤倉岳

や小岳の大斜面の滑降は全く楽しい限りだ。今年は麓の雪消が早かつたため(我々は横内村まで國鐵バス、以下馬そり)近在の湯治客も多く、大廣間をぶち抜いての諸國民諸大會など催されて津輕の地方色さくぶる豊かであつた。たゞ残念なことに肝心の雪質だけが良好とは申しかねた。ひどいウィンドクラストの日や、雨の日もあつた。

それは麓の方が俄かに春めいてきたのに慌てた山の稜線が、せめては眞冬の姿をとめようと必死になつて護面を作つていっているといった感じであつた。八甲田山は年によつて相違があることは思うけれども、四五月頃思ひきつて遅く出かけて納めのスキーを存分に楽しむのに最も良い山であらうか。

この行終始、青葉の三浦敬三氏の良リダーの下に行動した。(参加者、吉田、村井、金坂、吉田、古澤)

新緑の雲取山へ

廣羽 清

天氣にめぐまれた五月の三、四日に第七回憲法發布記念都民大會の一行として行かれた雲取山行に加つて、久しぶりに五月の山のたのしさを味わつて心よい時を過しました。

丹波の部落でバスを捨てたのは午後の三時、三條の湯に向つて登つた。山ろくで散つてしまつた櫻にかわり、ここでは冬枯れたような木立の間に今をさかりと紫紅のミツバツツジの花が咲き誇り、あまりきれいなので一服の数もふえ、おかげで樂な登りとなつた。

すがすがしい秩父獨特の森林美をぬつて、足許の落葉の中からはシロバナエンレイ草、ヒトリシヅカ、イカリ草、アマドコロなどが顔をのぞかせていた。丁度植物採集に程よい時で山下一夫氏の指導に坂倉さんらの女性班は實にたのしそに、コマドリの鳴き聲をききながら、薄暗くなる頃まで花から花へと目を移していた。

六十才以上の神谷氏ら三名、本部から望月氏に、女性七名をまじえた二十四名の山行は、皆一人一人にかわつた山のよさを満喫した愉快な五月の山だつた。

札幌から

森谷 虎彦

小生も山が好きならばに北海

道まで来てしまいましたがおかげでスキーだけは事欠かない様な有様です、仕事も道廳の農地開拓部で水源調査を擔當していますので年の大部分を奥地で暮らしています。來年は國體が本道で行われるとのことで大いに期待しています。

五月四日 札幌にて

次號原稿のべ切

七月五日です。會員通信はもちろん、紀行、情報、書評、隨筆など御送り下さい。なるべく一行十五字にしてお書き下さるようお願いいたします。

登山用具の専門店

好日山莊

プライスリスト進呈

東京店 海野治良
中央区銀座西二ノ五 電話京橋(56)3600
大阪店 西岡一雄
北區堂ビル前協和銀行三階
神戸店 島田眞之助
生田區三宮町一ノ三二ノ一



各地支部の動靜
をなるべく今後
報道したいと思
います大小もら
さず御知らせ下
さい。

關西支部の動向

昭和二十七年年度の關西支部の動向は、本部のマナスルウ踏査行や團體の動きに歩調が合い、支部獨自の活動性にはやゝ動脈硬化であつた。

委員會三〇餘回、小集會八回、展覽會一回などがとりあげられてゐるが、小集會の參集會員がいつも少くマナスルウ報告會すら五〇餘名を數えたにすぎない。活動的の會員數の不足もあり上つて來ない過渡的現象などがあげられよう。特に前者については二八年は留意してみたい問題である。しかし展覽會などからうける一般的傾向としては上昇傾向がみられるし、一般の山の行事などは盛んである。支部活動のための本部との連繫や會員制度や支部の制度にも檢討の餘地は多分にある。特に關西支部の地域性については考えなければならぬ問題がある。上層より下層に至る幅の廣い層にまで、支部の行事などがゆき互るためにはどのような運営をすべきであらう。單に會員であるのみの安座と支部の發展進歩のために、關西在住の會員の支部への忠言・批判・後援をまつものが特に大である。

なお近日總會によつて新役員が発足する。大いに期待をかけた。

(S)

富山支部の一年間

昭和廿七年度支部總會を三月廿九日電氣ビル五階支部ルームで開催、議案(廿七年度收支決算、並に廿八年度豫算、及び役員改選の件)を審議し可決をみた。

支部長中田勇吉、副支部長木津誠一、理事長貴堂武時、理事吉田哲龍、遠藤、若林(本部、總務)中保(會計)田中(事務)牧野(渉外)藤平、園木、牛島(技術指導)評議員 中野峻陽外四名顧問 佐藤助九郎外三名

廿七年度に於ける主な行事四月九日、横會長、松方理事長外本部役員を招き座談會、四月廿九日一五五五日、春山講習會

六月廿七日、山岳講座開設。七月十九日一廿三日、夏山指導講習會、立山、劍、毎日、縣、共催十月四日一五日、國體豫選、立山三月廿一日一廿二日、春山スキー登山、懸案のルームが電氣ビル五階に完成、立山の秀麗をほしきまに眺められる世界屈指のルームと自負している。尚立山開發會社のケーブルは十

月頃美女平まで完成の見込み。

福島支部總會

五月十日、支部で二七年度の總會を開きました。出席者二五名、會計報告やら夏季行事の打合せなどを致しました。

この夏は六月五、六、七日、高體連登山講習會(講師 伊藤、川又、中島)をまた八月二日から三日までには縣體登山兼國體豫選登山を行う豫定です。

關西春秋會 第五回例會

於 大阪堂ビル清交社 マナスルウ先發隊歡迎晚餐會

昨秋マナスルウの登路偵察と學術研究の旅を終え歸國した今西先發隊長、中尾、林兩隊員を迎え二月五日歡迎晚餐會を開催。

ヒマラヤ登山には戰前より深い關心を寄せ研究を積んでいた春秋會會員たちは三氏を圍んで熱心に質疑と談話を交し今西隊長より謝辭とユニフォームを交えた遠征報告があり本隊の登攀ルートに豫想、裝備などを中心に話がはずむ。竹節毎日特派員よりの借用の寫眞百葉

にも一同の興味が集つた終つて別室で關西支部と共催の報告會に臨み今西、中尾、林三氏の講演をきいて八時散會した。(TOM生)

晚餐會出席者は次の通り

今西 錦司、中尾佐郎、林 一彦、中原繁之助、津田周二、岸田權二、水野祥太郎、田中榮藏、二木信次、栗飯原健三、前田光雄、島田眞介、青井竹三郎、富田健一。

マナスルウ登山隊基金

會員はじめ岳人諸賢の御協力により三二萬〇五〇〇圓に達しましたが未だ目標の六〇萬圓には程遠いのて更に一層の御支援をお願います。尚御送金は振替口座東京四八二九番を御利用下さい。

芳名錄(四月廿日現在)

▲壹萬圓 松方義三郎、加賀正太郎、近藤茂吉、藤山愛一郎、山形山岳連盟 ▲七千三百五拾圓 原町高校 ▲五千圓 明治屋東京支店 池田知幸(石川支部長) 岡崎眞一 酸湯温泉KK、山崎春雄(北海道支部長) ▲四千圓 大澤伊三郎(山梨支部長) ▲三千五百圓 三井松男 ▲三千圓 沼井鐵太郎、廣瀬久忠、日高信六郎、牧野衛、別宮貴俊 ▲二千五百圓 中澤眞二、石岡繁雄 ▲二千圓 島田眞、石原憲治、愛媛縣山岳連盟、高野鷹藏、富田健一、東京電氣工業KK、田邊主計、太田敬、飯山達雄、名取忠彦、林梯助、水口彌、成蹊踏高會、成蹊山岳部、柴山乙彦、▲千五百圓 越後支部奥野智行、白樺莊主人、伊藤幸一 ▲千圓 細田德壽、成瀬岩雄、坂倉登喜子、野口末延、原田幹市、三森幾二、足立源一郎、青木美代、田村久治、加治甚吾、三美化成工業、黒崎工場、梶本徳次郎、富田治三郎、淺野清彦、沼倉寛二郎、小林義正、崎田照、湯淺充泰、増本茂濱口巖根、川村博通、藤村隆輔、十龜太郎、大島堅造、石黒清藏、龜田與三三、山崎公平、伊達忠雄、跡部昌三、増田繁雄、額田敏、大團信、加納一郎、中央大學山岳部、藤木九三、大島輝夫、

石渡清、村上勝太郎、本多紀元、藤井運平、林和夫、望月達夫、金坂一郎、交野恒一、今村正二、杉本義信、楢有恒、大塚博美、神谷恭、原金教、入澤文明、石原巖、内山正二郎、松本照次郎、穴吹榮太郎、角田誠策、高山武、神木岩松、宇津野和彦、日綿實業KK山岳部、小瀧武夫、松本善二、横山八郎、佐々保雄、田中榮藏、鳥山梯成、日本極地研究會、日本興業銀行山岳部、齋藤兵三郎、木村美那子、明峯山岳會、山下部威、富士工業三鷹工場、片山全平、帝銀山岳部、齋藤捨治、川又恒一、船越好文、瀨名貞利、村井米子、冠松次郎、新日本窒素KK、野口二郎、早川安治、巨摩高校、武田食料KK、山梨中央銀行、淺原重繼村田顯、門鐵若松機關區山岳部、酒井捷之助、岸田權二、岸田幸一大室貞一郎、日立製作所日立工場、渡邊公平、▲八百圓 加藤數功、木下是雄、日産吉原工場、▲七百圓 新ハイキング龍爪山行參加者、▲五百圓 木村武男、吉田竹志、和田如代、藤島玄、秋山實中原繁之助、馬場忠三郎、横田敬一、中野愛三、鈴木岐角、古市義孝、星野愛、矢田城太郎、名須川渡、的場義夫、沼田鐵治郎、森谷虎彦、神保信雄、今村信吉、藤井保、山井基福、篠崎二郎、加藤幹太、江口芳樹、山鹽館、山口滋嗣、大内來三、青木勇、エドワーズ・ロングロット、池田光二、村田康、渡邊定助、成川洋一、野村六郎、石井澄男、石川誠一郎、濱田勝、高杉正樹、吉田誠、日川高校山岳部、態ノ湯、榎本進、藏王辻屋、伊藤秀五郎、山崎金次郎、見學玄

NEVADO SALCANTAY の 初 登 頂



ペルー・アンデスのコルディレラ・ブランカにはフアスカラン（六七五米）フアンドイ（六二九五米）アルバーマヨ（六一二〇米）等の高峯があつて既に屢々登山が行われたが、同じペルーでもその南部のコルディレラ・グイラルパンバはまだ登山者が少く主峯ネグアド・サルカントイ（六二七〇米）は未登のまゝ残されていた。一九五二年の夏の初登頂に成功したのはアメリカの合同遠征隊で、フランス山岳会からはB・ビエール、J・ギルマン、コイガン夫人が参加し、アメリカからはG・ベル、G・マシウス、D・マイトル、J・オーバリン、F・アイレスが加わり合計八名の隊であつた。佛の二人は一九五一年の佛白合同コルディレラ・ブランク遠征隊の隊員であり、オーバリン、アイレス兩氏は前にアルバータの記念ピッケルを送つてくれた人である。

緊密に連絡協力して一隊となり、結果は成功をおさめたといわれている。言語の問題は、スペイン語に堪能なコイガンとベル、マシウスがおり、オーバリンが佛語を話したので不自由は全くなかつた。一行は佛米兩國からそれぞれ飛行機でリマへ着き、更に雄大なアンデスの上空を飛んでクスコに集結し、六月下旬リマタンボの部落から馬四十頭を荷をもたせて山旅に上つた。パス・デ・クルスカサを越えてパンバカファナの谷に下り、更にパン・デ・パルカイカサの峠を越えて七月中旬サルカントイ北東山麓四六五〇米にB・Cを設けた。

ルートを東稜と北稜間の小さな尾根に選び、C1をこの尾根上五一八〇米の雪の臺地に、C2を更に五五五〇米に設けた。C1とC2の間はさして困難はなかつたがC2からは瘦せ細つた急峻な尾根となり平均傾斜は五〇—五四度で、不斷のステップ・カッティンが要求された。不安定な天候と困難な登攀のため豫想外の時日がかつた。七月三十日の夜C2の真近かをおそつた雪崩は休憩中の一行の心膽を寒からしめたが、休暇がきれて先に歸國したオーバリンを除いた七名がC2に集結した八月三日には、山頂攻撃の態勢が整えられた。翌四日は四時に起床、テントに残るギルマンを除いた六名は六時一〇分C2を發して登攀を進めたが、八時ガリーの頭に着いた時は天候悪化の徴があつたので引返し、五日には更にビザアタの準備をもつて八時三〇分再

度發足、ベルとアイレスの組が終始先頭となつて遂にサルカントイの低い頂に達し、同年七月、こゝまで登つたペルー在住のスイス人方が残した旗棒を見出し更に半哩彼方の三〇米位高い眞の頂に向つてナイフ・エッジを辿り、四時三十分頂に達して目的を遂げた。直ちに下山の途につき低い頂の近く六一五五米の高所でビザアタ翌日無事C2へ下つた。歸國の途上空から眞近にサルカントイ眺めた時、頂上附近の足跡はまだはつきり一行の眼に映じたという。（近着のMazama vol. XXXIV, No. 13, Dec., 1952 所収 "Nevado Salcantay, Peru" by F.D. Ayres による—T.M.）

★早大アコンカゲア遠征隊歸國す

會員關根吉郎氏を隊長とする早稲田大學山岳部員及びOBを以て組織されたアコンカゲア遠征隊は既報の如くアコンカゲアの主峯及び南峯（六九三〇米）の登頂に成功し、三月七日ブエノスアイレス出帆の大阪商船さんとす丸で歸國の途にあつたが、五月八日無事神戸に入港、兵庫縣山岳連盟、本會有志共催の歡迎會に臨んだ後、十五日大阪發のつばめ號で歸京した。京本社講堂で同社主催の報告會が行われたが、本會では二十一日別掲の如く小集會に於て關根隊長の報告を聞くと共に歡迎會を開催する豫定である。

なお同遠征隊にはペロン大統領より各々金メダルが贈られた。

大橋克也、小態信一郎、藤崎定雄、樋口淳一、小林哲司、荒川寛義、鈴木康義、古田初太郎、岐阜大教養學部、佐々木賢治、稱名小舎、山岳義明、二階堂政雄、東洋高壓山岳部、大同鋼板、坂江善治、北村武彦、府川裕、杉山孝、佐藤光遠、藤繁、中島正夫、石井文彌、三浦通庸、久木春男、宮尾越、小畑貞吉、川越孝次、田邊多聞、晚峯岳友會、峽東山岳會、小澤一郎、内田隆章、南嶺會、小池義正、望月親、望月雅郎、今澤茂、保坂次郎、岩間升、甲府電報局、三井運動具店、太田源一郎、遠藤武夫、保坂佳三、田野口竹之助、伴野亘、昌永商事會社、石川眞一、小田和友藏、保坂一、橋田清美、甲府一高御坂山岳會、山梨大學、和知昭三、甲府ワンドラー、窪田輝良翁、石川文一、清水芳治、秋山征男、中村庸夫、柳澤政利、廣瀬不二三、芦澤俊雄、三井彌一郎、甲府商業昭和山岳會、大堀員敬、大久保勝己、草刈三郎、齋藤清吉、仰木政次郎、山田博、伊藤集、名須川浩牛、山大六、中村慶藏、鹽田一二、牧野平五郎、町野篤佐、若松山岳會、粕谷利一、佐久間惇一、美ヶ原山小屋、北村嘉助、新井清、森龍太郎、筑紫山岳會、日鐵二瀬鎮業所AC、ふそう山岳會、佐々木高美、竹中隆雄、秋月良造、青木慶、佐々木信、柴田均二、福井岳友會、大洞重二、ブリッジストン山岳班、前田武治、港叶、伏見謙次郎、石井貞吉、高木菊三郎、福田嘉四郎、▲三百圓—手塚一雄、水田健之輔、杉浦英午、▲二百五十圓—大間知徹三、▲二百圓—石井稔、柳田達男、▲千圓堀田彌一

高頭仁兵衛翁の消息

新潟支部の藤島玄氏より次のような報らせがあり、われらの大先覺たる高頭翁の晩年の御起居が不遇であるが、御元氣であるので一度本部のルームへ御案内したいと思つて、果し得ないのが残念だという意味のことが付け加えてありました。以下は今年の正月、翁から藤島支部長への賀状です。

老生と同年とばかり想ひ居りたる東京の志村鳥嶺君から、枝もつかずに八十の阪と云う句を頂戴驚きました。

次に彌彦に參詣致しました村の一青年が、何とが漏らしたことが（註彌彦山頂の高頭仁兵衛翁像を云う）動機となりましたことに、分家の二人と區長とが發起となりまして、老生の爲とて六尺に十三尺の巨石を求め、記念碑を建てゝくれることになりました。平常無爲に過して居りますから、老生よりも老妻が非常に嬉しがつて居りまして茲に深く御禮を申し上げます。

村人の情に巨石は供えあれど喜の字を壽ぐ弟妹もなき

昭和廿八年一月十一日早朝 喜字翁 凡叟敬白

二白 加賀氏の大山崎の御別邸に鳥水君と二人にて一泊を致したことを想ひ出しました。



會務報告

小集會記事

第一四九回 二月十九日(木)
講演「マナスルウの再舉について」
講師 高木正孝氏

マナスルウに就ては一四七回小集會で田口二郎氏の「踏査先發隊から歸つて」一四八回に今西錦司氏の「マナスルウ一周」の報告の講演があつた。今西氏の話には山については省略された處があつたので、今度の講演を人々は楽しみにしていたのであつた。講演の後で、百枚ばかりのスライド(カラ・フィルム)が寫され、それらの一つ一つについて高木氏から説明があつたのは正に我々の期待してゐた處であつた。マナスルウのいくつかの寫眞は初めて人目にふれるものであろう。ティルマンの「ネバル・ヒマラヤ」(一九五二年刊)にあるのと同じ様なものもあつた。アンナブルナのグラン・パリエはヘルツォグの本でも見たが極めて印象が深かつた。會報に今西氏のくわしい通信が出てゐるからこゝには述べない。小集會の講演がしばしば私の心の窓を開くときき書いたが、前回の田口氏の話の中でトンデニをたつてマナンボトへ近づくとあた

りの風物も急に西藏風になり正に西藏からの風が吹いて來るといふ處が誠に好きであつたが、高木氏の話にも同じ處があつた。これから數ヶ月の間、廣く又極めて高い世界に向つてゐる會員たちの事を、その成功を希つて暮すこととはうれしき事である。

演題も「再舉について」というのであり、今度のセジュールについては、まだ決つていない事が多いにしろ、サマに一應ベイス・キヤンプをおくこと以外に餘り述べられなかつた。私はもう少しこの方面もききたく思つた。(この記事は前號に一部掲出した。)

第一五〇回 三月十九日(木)

講演 マナスルウ登山の裝備その他の報告
講師 林和夫 望月達夫
舟橋明賢の三氏

第一五一回 四月十六日(木)

講演 山の植物の話
講師 本田正次博士
今後植物採集の會を行いたいという話が出てその第一回を五月廿四日、高水三山で行ふことになつた。

一九五三年度會員總會

四月十八日(土) 二時半から東京萬世橋交通博物館講堂で交野理事の司會で開催、出席者會員一一五名(内委任出席一〇六五名)

會長挨拶 横有恒氏
議長選舉 定款により横會長を選出

議事

1 一九五二年度事業報告 松方理事長
2 一九五二年度會計報告、一九五三年度豫算附議の件(別掲の通り) 沼倉理事

3 役員改選の件 成瀬理事

役員總會推薦の理事候補は原案通り可決

4 支部報告

越後支部(藤島玄氏) 富山支部(沼倉寛二郎氏) 東京支部(野田三郎氏)

5 定款變更の件 成瀬理事

副會長設置の件を説明、これにつき若干の質疑應答があつたが結局副會長設置は定款の各條に於て變更をしなければならぬため新役員總會に於て更に検討の上その變更を一任することに決定。

議事終了後マナスルウのスライドを觀賞、五時終了した。

★圖書室増築基金

目下募金中ですから多少に拘らず陳出ねがいます。

★會費納入について

▽基本會費 年額六〇〇圓
▽ルーム維持費 年額一五〇圓

千葉、埼玉、神奈川各縣居住會員は七五〇圓を、東京在住會員は更に支部費五〇圓を加え八〇〇圓をお納入下さい。

▽地方會員は六〇〇圓、
▽入會金は五〇〇圓

團體加入は従來通り代表者として入會差支えありません。

會の財政は別掲收支決算で判りの如く誠に悲觀すべき状態です。支出の項目も殆ど冗費といふべきものはない。これ以上に支出を切詰めることは本來の活動を中止するに近いので、われわれ役員一同更に創意工夫をこらすこと無

論必要ですが會員各位におかれても前記會計状態を御賢察の上、本會運営のため會費はなるべく早く

に御納入下さるようお願いいたします。

御送金の場合には振替口座東京四八二九番を御利用下さるのが便利會費未納の方には残念ながら會報や山岳並びに種々の御案内も中止せざるを得ないことがあるかも知れませんが御諒承願います。

★「山岳」のバックナンバー

戦後發刊された「山岳」中左の號は若干残部がありますから會員には割引頒布します。未入手の方はなるべく早目に申込んで下さい

第四四年一號 一五〇圓
第四四年二號 一五〇圓

二冊同時に申込む場合は二八〇圓、送料二四圓。尚第四六、四七合冊版は三二〇圓、會員外の方にもお頒ちしますから賣切れぬうちに申込下さい。

★會員名簿 新刊

戦後ではじめての會員名簿は四月半漸く刊行され、當初金百圓を御拂込みの方へは逐次發送中です。新たに御希望の方は一部金百圓御拂いの上事務所で御受取り下さい。地方會員は乍御手数數前金にて御申込み下さい。體裁は戦前と同じくA5版横組みで約五〇頁、今後なるべく定期的に増補訂正したいと思います。

尚今回分は費用の関係で餘り澤山作りませんので希望者はなるべく早く御申込下さい。

日本山岳會1952年度收支決算報告

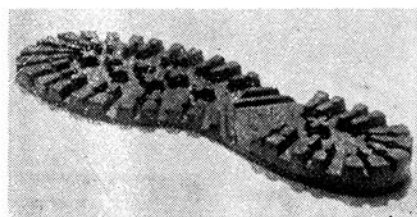
1953年3月31日

収入の部	金額	支出の部	金額
入會金 (52名分)	21,440.00	事務費	307,474.00
會費	437,915.00	體協關係會費	24,000.00
會費 (1952年度610名)	394,915.00	體協關係會費	140,000.00
" (1951年度126名)	39,665.00	備品費	9,610.00
" (1950年度以前17名)	2,905.00	消耗品費 (文具を含む)	27,119.00
廣告料	162,100.00	會員章製作費	17,250.00
會報廣告料	57,600.00	交通費 (通勤費を含む)	15,185.00
山岳 "	104,500.00	通信費	74,310.00
山岳賣上金	9,780.00	圖書室管理維持費	61,607.00
會員章賣上金	3,011.00	光熱費及修繕費	44,443.00
地圖賣上金	420.00	公課及保險料	17,164.00
貸室料	2,130.00	事業費	53,542.00
雜收入寄附金事業収益等	10,090.00	國體事務費	11,598.00
第七回國體事務費引當交付金	50,000.00	印刷費	1,270.00
會員名簿豫約a/c	1,000.00	會議費 (會員總會等)	7,050.00
山日記販賣益	103,500.00	小集會費	7,120.00
未收會費a/c 都内に於ける未收分	22,500.00	圖書費	2,156.00
差引今期收支損金 (次期へ繰越)	125,926.00	諸會合費 (年度壯行會貴賓招待)	4,880.00
(借入金)		雜費	19,468.00
合計	949,382.00	出版費	373,838.00
		會報 161~166號6回發行	112,880.00
		山岳 46, 47 號	150,400.00
		未拂山岳報費	64,678.00
		未拂會報費	32,630.00
		"山日記編輯費	13,250.00
		前期より繰越損金	146,927.00
		支部a/c 會費預り金	5,994.00
		合計	949,382.00

日本山岳會1953年度收支豫算

1953年4月1日

収入の部	金額	支出の部	金額
入會金 @500.00×50人	25,000.00	事務費	340,000.00
會費	453,000.00	體協關係會費	30,000.00
28年度@750.00×200人	150,000.00	體協關係會費	180,000.00
" @600.00×400人(地方)	240,000.00	備品費	10,000.00
27年度@350.00×50人	17,500.00	消耗品費	25,000.00
" @300×70人(地方)	21,000.00	交通通信費	15,000.00
26年度及前年度 (200×10人)	24,500.00	圖書室管理維持費	80,000.00
未徴収 (750×30人)		圖書室管理維持費	63,000.00
廣告料收入	174,000.00	公課保險料	45,000.00
(山岳)	120,000.00	事業費	18,000.00
(會報 6回@9,000.00)	54,000.00	小集會・會議費・國體事務費	40,000.00
山日記出版益 (1,953年度山日記)	80,000.00	圖書費	35,000.00
第八回國體事務費引當交付金	50,000.00	出版費	5,000.00
會員章賣上金	2,500.00	出版費 1,200部	317,000.00
既刊山岳賣上金 30部 @300.00	9,000.00	會報費	200,000.00
地圖賣上金	500.00	編輯費	114,000.00
貸室料	2,000.00	豫備金	3,000.00
合計	796,000.00	前年度繰越損引當金	10,000.00
		合計	26,000.00
		合計	796,000.00



山友社 高橋靴店

東京都新宿区三栄町3
電話 四谷 (35) 1929

八重洲口營業所開設
中央區吳服橋二の五
東京驛八重洲口下車
鐵網ビル筋向イ角
電話(27)五六五四

昭和廿八年五月廿三日發行
東京 都千代田區
神田 駿河臺四ノ六
發行所 社団法人 日本山岳會
編集者 渡邊公平
電話 自五一五一一 日本體育協會
神田 至五一五一一 振替口座東京四八二九番
東京 都港區赤坂區池五番地
印刷所 株式會社 技報堂

★六月の小集會は中止
します
今年は七月にマナスルウの報告
を豫定しているため六月は中止し
ます。